

リヨン軽罪裁判所における 被告アナキストの代表陳述

(クロボトキンによる、一八八三年一月十九日)

アナキーとは何か、アナキストとは何か、これを述べよう。

アナキストとは、諸君、いたるところで言論の自由が説かれていた世紀において、無制限な自由を頼みとすることを己れの義務と考えた市民のことである。

しかし、諸君、われわれは、世界のどこかの、絶対的な自由、ただ自由のみを、いっさいの自由を要求する数千、数百万の労働者である！

われわれは自由を欲する。すなわち、自分の意にかなうことをなし、自分の意にかなうことだけをなす権利とその手段を、当然の不可能事、および、等しく尊重すべき隣人たちの要求以外のいかなる制限もなしに、自己のあらゆる必要を全体的に満足させる権利とその手段を、すべての人間に要求する。

われわれは自由を欲し、自由の存在はいかなる権力の存在とも両立しえないものと信ずる。その権力の起源や形態がいかなるものであろうと、選挙されたものか強制

ではなく、諸君を飢えさせる者である。それは、諸君の襟首をつかまえる者ではなく腹をとらえる者である。

平等なくして自由はない！資本が日々少なくなりつつある少数者の手に独占され、何ものも、公教育さえも平等に授けられず、これに最後の一銭まで支払わせられる社会には、自由はない。

われわれは、人類共同の遺産である資本は、過去および現代のもろもろの世代の協力の成果であるがゆえに、万人の処理に任せられるべきものであり、したがって誰一人それから排除されえないし、そのかわり何びとも他人を犠牲にしてその一部を独占することはできないと考える。

要するに、われわれは平等を欲する。自由の必然的帰結というよりも、むしろ本源的条件として事実上の平等を欲する。各人からその能力に応じて、各人へその必要に応じて。これが、われわれが衷心からまた力強く欲するところのものである。これは、合法的かつ必要なもろもろの要求より優位にある命（ラビエール）令ではまったくないがゆえに、そういうものなのである。これゆえにこそ、人はわれわれにあらゆる罪の烙印を押そうとしているのだ。

われわれは大罪人だろう！われわれは万人のためにパンを、万人のために労働を、また万人のために独立と正義を要求するからだ。

されたものか、君主制か共和制かにかかわらず、また神権と人民の権利、聖油入れ（フランス国王の戴冠式に用いられた）と普通選挙のいずれに鼓吹されたものかにかかわらずなく、そのようなのである。

歴史はまた、われわれに、政府はすべて似たりよったりで、同程度のものであることを教えるために存在している。しかも最良の政府こそ最悪である。あるものにはより多くの厚顔無恥が、他のものにはより多くの偽善があるろう！実際にはいつも同じやり口、いつも同じ頑迷さだ。一見より自由主義的な者たちさえ、立法という工廠の塵埃（埃）の下に、邪魔な反対派向けに、「インターナショナル」に関する何か細々しい法律を附えておく。

いいかえると、悪は、アナキストの見るころでは、政府のこれこれの形態にも他の形態にもあるのではない。それは統治の観念そのもののなかに、権威の原理のなかに存するのである。

一言でいえば、人間の諸関係において、行政的・法的保護監督、強制的規律を、いつでも修正し解消しなおすことのできる自由な契約に取ってかえること、こうするのがわれわれの理想である。

それゆえアナキストは、民衆に、神なしにやってみてよくことを学んだように、政府なしにやってみてよくことを教

えたいと思う。民衆は同様に、所有者なしにやってみてよくことをも学ぶであろう。実際、最悪の専制者は、諸君を投獄する者で

叛逆者の言葉 1885

国家の解体

中世諸制度の崩壊後、新興諸国家がヨーロッパに姿を現わし、征服や策略や殺人によって己れを固め拡張したときには、それら国家はまだ人事についてはごく狭い範囲に干渉するにすぎなかった。

今や国家はわれわれの生活のあらゆる発現に介入するにいたっている。国家はわれわれを生まれてから死ぬまでその腕で締めつけている。それは、あるいは中央国家として、あるいは州または郡国家として、あるいは自治体国家としてわれわれの一步一步を追跡し、どの街角にも立ち現われ、われわれに強要し、われわれをつかまえ、いらだたせる。

国家はわれわれのあらゆる行為について法律を制定する。国家は法律と法令を山のごとく積み重ね、その中ではどんな悪賢い弁護士でも道が見出せないほどである。国家は日々に新しい歯車を作り、それを修理した使い古しの時計に下手にあてがい、そして、それを動かすこと

を引き受けた者にさえ刃向かうほど、複雑で雑然とした妨害的な機械を作り出している。

国家は、役所の汚れた窓ガラスや、ばかげたわけのわからぬ言葉を書きつらねた無用な文書をおしてしか世界を知らない官公吏、手くせの悪い蜘蛛の大群を、最少限の労働で最大限の俸給を保証するために、ただ一つの宗教、金銭の宗教しか、ただ一つの心遣い、黒、紫、白のどれであれ、一つの政党にすがりつく心遣いしかもないいかさま師の一群を、創り出している。

この結果がどうなるか、われわれはただあまりにもよく知っている。国家の活動で、それに不幸にもたずさわらなくてはならぬ人々に反感を起させない部門が一つでもあろうか？ 国家が、何世紀にもわたる存在と表面的な繕いのもとで、まったくの無能を証明しなかつた部門が一つでもあろうか？

中世のコミューンから現代のコミューンへ

以下のテクストは、クロボトキンの最も重要なものの一つであり、またとくにスペインのリベルテール共産主義に最大の影響を及ぼしたものである。しかし彼は必ずしもよく理解されはしなかつた。スペインのあまりに数多いアナキストにとって、クロボトキンとは、中世のコミューンの復活を望んでいた者であり、また彼らはきまつてこのいわゆる過去への回想を、彼らの国の地方になおかくも生きつづけている、原始的で分離主義的で自由な、農民共同体の伝統と混同したのである。

同様に人々は、クロボトキンが本来のすなわち地域的コミューンから、もはや地域ではなく、そのメンバーは都市と農村に散在し、そこでは、シャルル・フーリエ流に、「これこれの個人が趣味を同じくする他の諸個人と集団をつくることよつてのみ、自己の欲求の満足を見出す」類縁者の集団に移るときも、彼に従おうとするだろう。

ここでは、クロボトキンとスペインのリベルテール共産主義者の一部との繋がりは、直系的である。彼らは一九三六年五月サラゴサ大会において、黄金時代や「自由コミューン」へのノスタルジー、小祖国の分離主義に大きな役割を果たし、当時時間的に迫っていた社会革命の前夜に、いささか不釣合な懸念をいだいて、ヌーディストと自然崇拜論者の類縁者集団、「工業化忌避者」に傾いたのである。

しかしクロボトキンを引き合いにする、こうした森林で理想主義的な考え方に、スペインのアナルコ・サンジカリストの著名な経済学者ディエゴ・アバ・デ・サンティリヤンは強く反論した。彼にとっては、少なくとも経済的見地からすると、「自由コミューン」など存在しえない。「われわれの理想は」と彼は説明している、「革命の中で一國と諸外国との経済全体のうちに結合し、連合し、統合されたコミューンである。……社会化され、管理され、計画化された経済こそ絶対必要であり、現代の経済世界の進展に対応するものである。

われわれが、社会革命はコミューンの解放によって行なわれるべきであり、革命に必要な雰囲気と革命を達成する手段をひとりわれわれに提供しようするのは、国家から

実際、クロボトキンに関するこの解釈は、少なくとも部分的には不正確である。事実、クロボトキンは、マルクスがその『フランスの内乱』でなしたように、過去のコミューンと将来のコミューンとの間に認める本質的な差異を強調することをやめてはいない。鉄道、電信、科学進歩の今世紀においては、コミューンは、十二世紀におけるそれとはまったく別の相をもつであろうことを彼は力説している。現代のコミューンは、地方的領主ではなく、国家にとつてかわることを目指すであろう。それは、自治体主義たるにとどまらず共産主義的であるだろう。「その城壁内に制限する」どころか、「拡張し、普及する」ことにつとめるだろう。そしてクロボトキンは、今日「ちっぽけなコミューンは八日と生きえないであろう」とはつきり確言している。それはぜひとも同盟を結び、連合することを必要とするのである。

だが、この点でアナキズム理論家の思想はより不確定となり、それは、ずつとあとになって、彼の後世のスペインの弟子たちが加えうるとした、理想主義的および分離主義的解釈を正當づけるものである。

各コミューンは、クロボトキンにおいては、単一のコミューン連合に挿し込まれるのではない。それはあらゆるものにもまして自由を大切にすることである。ただし、ブルードン、バクニン、ジャム・ギヨム等々の伝統的条件においてのことである。各コミューンは左右に、またこういえるなら、出まかせに、絡み合い、交叉し、重なり合うあらゆる種類の連合の絆を結んでいる。これこそは、何よりも自由を大切にする者にとっては魅力のある、たしかに熱狂的な展望であるが、しかし現代型の計画をとまなうものとしてのことである。

解放された、まったく独立のコミューンであるというとき、人々はわれわれを、すでに過去のすたれた社会形態を生き返らせようとするものだと思難する。「だがコミューンは」と人々はわれわれにいう、「過去の事実である。国家を破壊し、そのかわりに自由コミューンを建てることよつて、諸君はわれわれの眼を過去に向けさせ、われわれを中世のさなかに引き戻し、コミューン間の昔の戦争を再び引き起こし、歴史の過程でかくも骨を折って獲得した国民的統一を破壊しようとしている！」

よし、この批判を検討しよう。まず最初に、過去との比較は、すべて相対的価値しかもたないことを確認しよう。実際、われわれの欲するコミューンが、事実中世コミューンへの復帰にほかならなかつたとしても、コミューンが今日、七世紀も昔の形態をまといえないことを認める必要がないだろうか？ ところで、今日、鉄道、電信、世界主義的科学、純粹真理探究の世紀に建設されるコミューンが、十二世紀に存在したものとほきわめて異なる組織をもつこと、われわれが、新しい条件の中におかれ、必然的にまったく異なる結果をもたらすべき、まったく新しい事実と直面するであろうことは、明白ではないか？

なおまた、さまざまな形態の国家を擁護するわれわれの反対者たちは、われわれも彼らの反論にしごく似た反論をなしていることを、よく記憶しておかなくてはなるまい。

われわれもまた彼らに、過去に眼を向けたのは彼らだと、より有力な根拠をもっていうことができる。なぜなら、コミュニティは国家とまったく同様に、古代的形態だからである。ただ次のちがいが存在する。国家は、歴史上あらゆる自由の否定、絶対制、専制、その臣民の破滅、絞首台、拷問を表わすのに対し、われわれが歴史の最も美しいページを見出すのは、まさにコミュニティの解放、国家に対する民衆とコミュニティの蜂起のうちにおいてである。たしかに、過去に想いをめぐらすといつても、われわれが注視するのは、ルイ十四世やルイ十五世、またはエカテリーナ二世ではない。それはむしろアムルフイ(イタリア、サ)やフイレンツェのコミュニティや共和国、ツールーズやランのそれ、リエージュやコールトレー、アウグスブルクやニュルンベルク、プスコフやノヴゴロドに向けてである。

したがって問題は言葉や詭弁で満足することではない。重要なのは、仔細に研究し分析し、ただ次のようにいうだけで満足する人たちの真似をしないことだ。「だがコミュニティなど中世のものだ! だからそれは駄目なのだ!」——「国家、それは悪の過去だと答える。だから、それはなおさらに糾弾すべきなのだ!」

*

中世のコミュニティと、今日建設される、おそらく間もなく建設されるであろうコミュニティとの間には、多く

乱行為をこらしめるため、その武器をおくったのは、まさに王の代表する国家だったからである。

明日のコミュニティは、もはや上に立つものを認めえないことを知っているであろう。その上にあるものとしては、自らが他の諸コミュニティと自由に合意した連合の利害だけである。中間項などありえないことも知っている。あるいはまたコミュニティは、己れの欲するすべての制度を手にいれ、あるいは必要と見るあらゆる改革や革命を行なうことがまったく自然であるか、それともまた今日までそうであったもの、すなわち国家のたんなる下請けでありつづけ、国家のあらゆる活動の中に鎖つなぎにされ、つねに国家といまにも争いをはじめようとしており、ついで起こる闘争ではきまって負かされるかであるだろう。コミュニティは、国家を破砕し、国家を連合体にとりかえなくてはならないことを知っており、それに従って活動するであろう。コミュニティは、以上のことをする手段をも有するであろう。今日、コミュニティ蜂起の旗をあげるのには、もはや小さな都市だけではない。それはパリであり、リヨンであり、マルセイユであり、カルタヘナである。やがてすべての大都市が同じ旗を掲げるであろう。本質的なちがいはあるとしたら、この点である。

*

領主から己れを解放することによって、中世のコミュニ

の本質的な差異があり、六、七世紀にわたる人類の発展と苛酷な経験とが掘った全深淵がうち開かれていよう。その諸原理を調べるとしよう。

十二世紀にこれこれの都市のブルジョアが形成した、この陰謀^{コンスピラシー}または「同信者団体」の主目的は何か? たしかにそれはかなり制限されている。目的は領主からの解放にある。住民、商人も職人も団結し、「何びとにもせよ彼らのうちの一人に害を与え、また彼をこんご奴隷として扱う」のを許さない旨を誓約する。コミュニティが武器をとって立ち上がるのは、旧支配者に対してである。「コミュニティは」と、オーギュスタン・ティエリが引用するある十二世紀の著作家はいつている、「新しい忌むべき言葉であり、これでわれわれが理解するのは、税を課する人々は、彼らが払うべき地代を領主に年一度だけ払えばよいことである。何か罪を犯した場合にも、彼らは法的に定められた罰金に代えてその罪をゆるされる。また農奴に課する慣わしになっている金銭の徴収についても、彼らはまったく免除されている」

かくして中世のコミュニティが蜂起したのは、実に領主に対してである。今日コミュニティが解放を求めるのは、国家に対してである。これは本質的なちがいだ。というのは、記憶しているであろうが、あとでは、コミュニティが領主に対して独立の実をあげようとするのを見て、年代記のいうところによると、「コミュニティのために王権に叛いて立ち上がるように見えるこれら怠け者たちの狂

ーンは、商品や資本の売込みによって都市の内部で私的な富を獲得していた富裕なブルジョアからも、解放されたのか? 全然そうではない! 都市の住民は、領主の砦を打ち壊したあと、すぐにコミュニティ内で彼らを屈従させようとする富商たちの城砦が立てられるのを見た。かくて中世コミュニティの内部の歴史は、富者と貧者との死闘、必然的に国王の干渉を招くことに終わった闘争の歴史である。コミュニティの内部に貴族制がますます発展し、民衆は、主要都市の富める領主に対し、かつて外部の領主に対して受けたと同じ屈従に再び陥り、自分たちにはコミュニティ内で擁護すべき何もものないことがわかった。彼らは、自由を獲得するために建てた砦を放棄し、それは、個人主義的制度的結果、新たな隷従の砦と化した。失うものとして何もない民衆は、富める商人たちが身を守るにまかせ、そして富商は敗北した。つまり彼らは、奢侈と放蕩にふけて柔弱となり、民衆の間の支持もなく、やがて国王の軍使の降伏勧告に屈し、彼らに市の鍵を渡さざるをえなくなった。ほかの都市では、富者自らが皇帝や国王や公国の軍隊に市の門を開いたが、それは彼らの上に襲いかかろうとする民衆の復讐を逃れるためであった。

だが、十九世紀のコミュニティの第一の関心は、社会的不平等をなくすことではないであろうか? そこに蓄積された社会的資本のすべてを掌握し、それを生産と一般の福祉の増進に役立てようとする人々の利用に供するこ

とではないであらうか？ 十九世紀コミュニティが第一に配慮することは、資本の力をくじき、中世コミュニティの崩壊を引き起こした貴族制の成立を永久に不可能ならしめることではなからうか？ それは司教や修道僧を同盟者にするのであらうか？ 最後に、それは、コミュニティ

のうちに国家の中の国家を作り出すことしか求めず、領主や国王の権力を廃止しながら、権力が、都市の壁によって制限されたところで、そのモデルのもついつい悪を保持するに変わりないことを忘れ、つねにその同じ権力をごく細部にまで再建するよりましなことを知らなかった父祖たちをまねるのであらうか？ 今世紀のプロレタリアは、貴族の称号を廃止し、これを帯びるのを不名誉なこととしながら、同時に新しい貴族制、大金持の貴族制を生起させたフィレンツェの人々のまねをするのであらうか？ 結局彼らは、市役所に押しかけて猷身的に先輩たちのまねをし、彼らがひっくり返したばかりの権力の階段をすべて再建するのであらうか？ 彼らは制度には手を触れずにただ人間を取り換えるのであらうか？

たしかにそうではない。十九世紀のコミュニティは、その経験に力をえて、より以上のことをなすのであらう。それは名称以外の点で共同的であるだろう。それは、たんに自治体的であるのではなく、共産主義的であるだろう。政治において革命的であるとともに、生産および交換の問題においてもまた共産主義的であるだろう。それは、国家を再建するために廃止するのではないし、また

城壁越しに手をさしのべようとしたとき、彼は、権力を振るい、ひとり戦争技術を知り、戦いに慣れた傭兵に金を払うブルジョアの意志に反して、何をなしたであらうか？

今や、なんたるちがいだらう。勝利を取めたパリ・コミュニティは、多少自由な市の諸制度を手に入れることだけにとどめるであらうか？ パリのプロレタリアートがその鎖を断ち切るべきとき、それはまずパリにおける、ついで農村コミュニティにおける社会革命であったのだ。パリ・コミュニティは、自衛のために戦っていたときでさえ、農民にこういった。土地を奪い取れ、いっさいの土地を！ しかもそれを口にするだけでなく、その勇敢な息子は武装して遠い村々に革命援助に赴き、独占者を追い出し、土地を奪い取り、それを欲しがり、それから収穫することのできるすべての者に返さなくてはならなかったであらう。中世のコミュニティはその城壁の中に閉じこもろうとしたが、十九世紀のコミュニティは、己れを拡大し普遍化しようとする。それはコミュニティの特権のかわりに人類連帯を確立するのだ。

*

中世のコミュニティはその城壁の中に閉じこもり、ある程度、近隣地域から孤立することができた。他のコミュニティと関係を結ぶときにも、この関係は多くのばあい、領主に対して都市の権利を擁護するための条約か、遠洋

多くのコミュニティが、委任による政府を廃止し、その主権を投票の偶然に委ねないように用心しながら、実例をもって範を示すことを心得ているであらう。

*

中世のコミュニティは、領主の軛をふるい落としたあと、その権力を作り出したゆえんのものについて、領主に打撃を加えようとしたであらうか？ それは、囲りにいる農民を助けに行こうとしたであらうか？ また農奴たちがもたない武器を身に備えながら、市の城壁の高い所から傲然と見下している不幸な人々に、その武器を提供したであらうか？ それどころではない！ まったくの利己心に導かれて中世のコミュニティは、城壁の中に閉じこもったのである。それは、何度、避難を求めてきた奴隷たちを前にして用心深く門を閉ざし、吊り橋を上げ、彼らを眼の前で領主の火繩銃に射ち殺されるままにしたことか。己れの自由を誇りながらコミュニティは、その自由を外部で苦痛に呻く者たちにひろげようとはしなかった。こうした代価そのもの、近隣に農奴制を保持するという代価をはらってこそ、多くのコミュニティはその独立を取得したのである。それに、田園の農奴が産業も工業も知らずにいつも土くれにしがみつぎ、鉄や金属や工業製品の調達をいつまでも都市に求めざるをえないようにしておくのが、コミュニティの大ブルジョアの利益ではなかったのか？ そして職人が彼らを農奴から隔てる

航海でのコミュニティ市民の相互保護のための連帯契約かに限られていた。そしてロンバルディアやスペインやベルギーにおけるように、真の同盟が結成されたときも、これらの同盟は、あまりにも類似点が多すぎて、特権上の差異のためあまりにもろく、間もなくして孤立した集団に分裂し、あるいは近隣諸国家の攻撃に屈服した。今日形成されようとする集団とは、どんなに異なることだらう！ 小さなコミュニティは、事の勢いとして、産業、商業、芸術の中心と継続的な関係をぜひ結ばずには、八日と生きることはできないであらうし、これらの中心も近隣の農村、周囲のコミュニティ、遠くはなれた都市の住民に対して、あらゆる門戸を広く開く必要を感じるのであらう。

これこれの大都市が、明日コミュニティを宣言し、その内部で私有を廃止し、全的な共産主義、すなわち社会的資本、労働用具および労働生産物の共同享受を導入するとしよう。そしてその都市が敵の軍隊に包囲されていないとすれば、数日の中には馬車の輸送隊が中央市場に到着し、小売商人は遠くの港からその都市に原料品の船荷を発送するであらう。都市の工業産物は、その住民の必要を満たしたあとは、世界のすみずみに買って行くのであらう。外国の人々は群をなしてやってくるのであらうし、すべての者が、農民も近隣都市の市民も外国人も、彼らの炬ばたで、すべての者が働き、もはや貧乏人も被抑圧者もなく、万人が自己の労働の成果を享受し、

何びとも不当な分け前を独占することのない、自由な都市の驚くべき生活のことを話すであろう。孤立は懸念すべきではない。合衆国の共産主義者たちが彼らの共同体で嘆かなくてはならないとしたら、それは孤立についてはなく、むしろ周囲のブルジョア世界の、彼らのコミュニティの物ごとへの介入である。

今日、国境の限界を倒しての商業と交易は、古い都市の城壁をも破壊し、すでに中世には存在しなかった結合を確立した。西ヨーロッパの人の住むあらゆる地点がかくも密接に結び合わされ、そのいかなる場所にも孤立は不可能となっている。山のがけ緑の道に沿うたどんな高い所にある村でも、工業や商業の中心地に引きつけられないものはなく、それとの関係を断ち切ることはできない。

*

大工業中心の発展はこれ以上のことをなすとげた。

今日なお郷党心は、隣接する二つのコミュニティのねたみを大いに刺激し、その直接の結合を妨げ、同胞相せめぐ争いをひき起こしさえするかもしれない。しかし、こうしたねたみが二つのコミュニティの直接の結合を實際に妨げることがあるとしても、有力な中心の仲介によってこの連合は確立されるであろう。今日、隣りあう二つの小さな自治体は、両者を直接結びつけるものを何もたないことがしばしばである。それらが保っているわずか

な関係は、連帯の絆を結ぶよりも闘争を生みだすのに役立つ。しかし両者はともに、それとひんばんな関係があり、それなしには存立しえない共通の中心をすでもっている。郷党心からくるねたみ、そのねたみがどのようなものであろうと、それら自治体は、そこで必要品を仕入れ、そこへ自己の生産物を持って行く大都市の仲介をおして結合するほかないことが明らかである。そのどちらも、この呼びかけの中心と関係を保つためには、同じ連合の一部となり、その周囲に結集しなければならぬであろう。

しかしこの中心は、周囲のコミュニティに対して困った優位を占めることはできない。産業および商業上の限りない多様性のため、人間の居住する土地はすべていくつの中心地に結びついており、その必要がひろがってゆくにつれてそれらの土地は、新たな必要に応じうる新たな中心に結びついてゆく。われわれの欲求はかくも多様であり、かくも急速に生まれるがゆえに、やがてただ一つの連合ではすべての欲求が満たせなくなるであろう。したがってコミュニティは、他のいくつもの同盟を結び、他の連合に加わる必要を感じる。食料品獲得のための集団の一員であるコミュニティは、必要な他の品物、たとえば金物を取手するために第二の集団の一員となり、さらに衣料品や芸術品のために第三、第四の集団の一員とならなくてはならないであろう。どこの国でもよいが、その経済地図をとって見るとよい。経済的国境などな

いことがわかるだろう。種々の生産物の生産と交換の地帯はたがいに混じりあい、絡みあい、重なりあっている。同様にコミュニティの諸連合も、その自由な発展に従うならば、やがてたがいに絡みあい、交叉し、重なりあいい、かくして「一にして不可分の」、緊密な網状組織をなすであろうが、しかしこれは、古代ローマの警士のもつ束桿の束ねた棒のように並べられただけの国家主義的集団とは、別個のものである。

このようにして、くりかえしのべると、各コミュニティは、ひとたび国家の保護から脱すると、たがいに衝突しあうことになるという人々は、一つのことを忘れている。それはすでにもろもろの地域の間には、産業および商業上の重力の中心や、こうした中心の数多いことや、絶え間ない関係やのおかげで、密接な結合が存在することである。彼らは、都市は閉ざされ、隊商が領主という強盗に見張られた困難な街道をゆっくりとった中世がどんなであったかを考慮していない。彼らは、われわれの都市の間をけつして涸れることのない川の水のように往き来する、人間や商品や手紙や電信や観念や愛情の流れを忘れてはいる。彼らは、比較しようとする二つの時代のちがいをはつきり知っていない。

それに、歴史は当時われわれに、連合の本性がすでに人類の最も力強い必要の一つになっていたことを証明していないであろうか？ いか国家が解体され、抑圧機構がその機能を弱めさえすれば、それら機能の間に自由

な結合が生まれてくる。フランス大革命のさいにおけるブルジョア軍隊の自発的連合を思い出すがよい。ナポレオンの征服軍のため、国家がその根底までもぐらつかされたとき、スペインで自発的に発生し、国の独立を救った、あの連合を思い起こすがよい。国家がもはや強制的団結をおしつけることができなくなるやいなや、自然の必要にしたがっておのずから団結が生じてくる。国家を顛覆せよ、その廢墟から連合社会が現われるであろう、真に一つの、真に不可分の、だが自由な、自由そのものによって連帯を増す社会が。

*

しかしもう一つの問題がある。中世のブルジョアにあってコミュニティは、国境で他のコミュニティからはっきり分離された、孤立国家であった。われわれにとつては「コミュニティ」はもはや地域的集団ではない。それはむしろ種属名であり、国境も城壁も知らぬ平等者の集団と同義語である。社会的コミュニティはすぐに明確に限定される全体ではなくなるであろう。コミュニティの各集団は他のコミュニティの類似する他の集団に必然的に引きよせられるであろう。各集団は、それを同一コミュニティの市民に結びつけているのと少なくとも同程度に強固な絆によって、他のコミュニティの集団と団結し、連合して利害関心のコミュニティを結成し、その構成員は多数の市や村に散在することになる。これこれの個人は、同じ趣味

をもち、多くの他のコミュニティに住む人々と集団をなすことよってのみ、その欲求の満足を見出すであろう。今日すでに自由な諸結社が、人間活動の広大な分野全体をおおいはじめている。余暇のある人間が結社をつくるのは、もはやたんに科学的、文学的もしくは芸術的趣味を満足させるためではない。人々が団結するのは、もはやたんに階級闘争のためではない。

人間活動の種々雑多な発現のうち、すでに自由に形成される結社によって表わされ、その成員がたえず増加し、かつては国家の特別の権限とみなされた活動にさえおよぶ新たな活動領域を日々に侵していないものは、一つとして見出しがたいのである。文学、芸術、科学、教育、商業、産(工)業、運輸、娯楽、保健衛生、音楽、遠大な企図、極地探険、なおまた国土の防衛、負傷者の救助、侵略者に対する防衛、裁判等、いたるところで私的発意が現われ、自由な結社の形態をとっているのが見られる。これが十九世紀後半の傾向であり、きわだった特徴である。

この傾向は、自由な発展をたどり、新しい広大な適用領域を見出して、将来社会の基礎として役立つであろう。自由な集団によってこそ、社会的コミュニティは組織化され、これら集団自体が城壁や国境を跡かたもなくするであろう。それらは、もはや地域的ではなくして、川や山脈や大洋をこえて手をさしのべ、地球のすみずみに散在する個人々と民衆とを、一つの同じ平等者の家族に

結合する、いく百万におよぶコミュニティとなるのであるらう。

革命政府

I

自由・平等・友愛がもはや空語ではなく、生きた現実となるためには、現存の政府を廃絶しなければならぬこと、今日までに試みられてきたあらゆる形態の政府は抑圧の形態であって、新しい形態の集団にとり代えられなければならないこと、このことについては、いかにわずかにもせよ、革命的な精神と気質をもつすべての人々がまったく一致している。実のところ、この結論に達するには、大して革新的であることを必要としない。現存政府の数々の悪と、それらを改善しえないことはあまりに顕著で、理性的な観察者すべての眼をのがれえないからである。政府顛覆に関しては、一般に、これがある時期には大した困難なしに行なわれることが知られている。政府が、カルタの城のように、叛乱を起こした民衆の息吹きの下にはほとんどひとりでに崩壊する時期が存在する。これは一八四八年および一八七〇年に見られたし、また近いうちに見られるであろう。

政府を顛覆すること、ブルジョア革命家にとっては、これがすべてである。われわれにとっては、社会革命の

発端でしかない。ひとたび、国家の機構が調子を狂わせられ、官吏の階層組織は解体していかなる方向に進むべきかを知らず、兵士は指揮官に信頼を失うなら、要するに首都防衛の軍隊が混乱におちいるなら、このときにこそ、われわれの前に、経済のおよび政治的奴隷制を永続化することに役立つものもろの制度を破壊するという大事業が、立ちあらわれてくる。自由に活動しうることになったら、革命家は何をなそうとせうであろうか。

この問題には、「政府ではない、アナキーだ!」と答えるのは、アナキスト以外にない。ほかの人々はみなこういう、「革命政府だ!」と。彼らは、国家またはコミュニティにおいて、普通選挙で選ばれた政府に付与する形態の点で異なるだけである。他に革命的独裁に賛成する人々もいる。

「革命政府!」これは、社会革命が何を意味すべきか、政府が何を意味すべきかを理解する者の耳には異様に響く二つの語である。これらは相矛盾し、たがいに破壊しあう。実際に人々は、数々の専制政府を見てきたし、革命に反対して反動に味方し、必然的に専制に傾くのは、すべての政府の本質である。だが人々はかつて革命政府なるものは見たことがなく、それもそれははずである。というのは、「無秩序」、混乱、非常に古い諸制度の数日の間の顛覆、既成の所有形態の暴力的破壊、カースト制の破壊、道徳またはむしろこれにとつてかわつていふ偽善について一般に認められている観念の急速な転換、個

人的自由と自発的行動、これらと同義である革命は、政府の正反対のものであり、その否定であって、政府とは「既成秩序」、保守主義、現存諸制度の維持、個人の自発性と行動との否定と同義だからである。それにもかかわらず、われわれはたえず、あたかも「革命政府」が王制や帝制や教皇制と同じように、最も簡明な、だれもが知っている事柄であるかのように、この珍奇なものが語られるのを耳にするのである!

いわゆるブルジョア革命家たちがこの考えを説いているのはわかる。彼らが革命で何を理解しているかをわれわれは知っている。それは、あからさまに共和制を一時的に取りつくりつることである。それは、今日ポナパルテイストや王党派に保留されている金儲けの役職を、いふところの共和主義者が手にいれることである。それはせいぜい、教会と国会を離婚させて両者の内縁関係に代えること、聖職者の財産を国家、とりわけ将来の行政者のために寄託すること、おそらくはなお人民投票もしくは同じ種類の何かの仕組みを設けることである。しかし革命的な社会主義者たちがこうした考えの唱導者になっていることについては、われわれは二つのことのうちの一つを想定することによってしか説明できない。すなわち、その考えを受けいれている人々が、それと理解せずして文学や、とりわけブルジョアがブルジョア階級用で作った歴史から汲みとつてブルジョアの偏見がしみこみ、なお奴隷制時代の産物である奴隷根性がしみこんで、自由に

考えることができなからである。あるいはまた彼らは、その名をつねに口にすることの革命を、少しも欲していないからである。彼らは、人々が、あとで「野獣」すなわち民衆を黙らせるためにしなくてはならないことをやるのは仕方ないとして、彼らを権力の座につかせるなら、現存制度の一次的取りつくろいで満足するのである。彼らが今日の統治者にそれをさせようとするのは、これに比べてかわるためではない。このような連中といっしょにわれわれは議論する必要はない。だから、本当に思い違いをしている人々にだけ話るとしよう。

大げさに吹聴されている「革命政府」の二つの形態のうち第一のもの、選挙政府からはじめよう。

国王その他の権力が覆えされ、首都防備の軍隊が潰走したとする。いたるところで動揺、公共の物ごとについての議論、前進の欲望が起こる。新しい考えが生まれ、真剣な変革の必要が理解され、行動することが必要であり、新しい生活への障害をあらかじめ除くため、破壊の事業を容赦なく開始しなくてはならない。だが人々はわれわれに何をなすよう提唱するのか？ 民衆を選挙に呼び集め、すぐに政府を選び、これにわれわれすべてが、われわれの一人ひとりが、自己の発意でなすべきことを任せることだ。

これが、一八七一年三月十八日以後、パリがなしたことである。「私は」とある友人がいった、「この解放のすばらしい時機をいつまでも覚えておいてやる。私はラテ

一八七一年三月の選挙よりも自由な選挙はかつてなかった。コミューンの敵たちもそれを知っていた。かつて多数の選挙民に、権力の座に、よりよい人々、未来を担う人々、革命家たちをおくろうという願望がこれほど滲みとおったことはなかった。そしてこのとおりが行なわれた。著名な革命家すべてが圧倒的多数で選ばれた。ジャコバン派、ブランキ派、インターナショナル会員の三つの革命的分派が、コミューン評議会に選出された。選挙はこれ以上の政府をもたらしことはできなかった。

人々はその結果をよく知っている。従前の諸政府が定めた形式の中で物ごとを処理する任務を負って、市役所に閉じこめられたこれら熱心な革命家たちは、己れの無能と空しさに心を打たれた。彼らのあらゆる善意と勇気にもかかわらず、彼らはバリ防衛を組織することさえもできなかった。なるほど今日、これはある人々、個人たちの責任にされている。しかし敗北の原因は個人にはない。それは採用された制度にある。

実際、普通選挙は、自由なものであるときにもせいぜい、その当時大衆の間に広く行なわれていたものもろろの意見の平均を代表する集会を、生みうるにすぎない。そしてこの平均は、革命の当初には一般に、達成すべき事業については漠然とした、きわめて漠然とした考えしかなく、それに採用すべき手段方策についても考察を欠いている。ああ！もし国民の、コミューンの多数の者

ン区の自分の高い階上の部屋から下りて、パリの端から端までの大通りを一杯にしている、この大きな野外クラブの中にはいって行った。誰も彼もが公共の問題について論じていた。個人的な関心事はすべて忘れ去られていた。物を買ったり売ったりすることはもう問題でなくなっていた。みんなが身も心も将来に委ねようとしていた。ブルジョアたちさえ、一般の熱意に引きずられて、新しい世界が開かれるのを喜んで見ていた。「社会革命をやることが必要なら、よし！われわれにもその用意がある」。革命の諸要素はもう存在していた。問題はもはやただそれらを活動させることであった。その晩部屋に入りながら、私は心の中でこういった。「人類はなんでも傷つけてきたのだ！」ついで選挙が行なわれ、コミューンの構成員が任命され、献身の力や行動への熱意がしだいに消えていった。各自がこういって平常の仕事に戻った。「いまはわれわれには誠実な政府がある。それに委せよう」。結果がどうなったかは人の知るところである。

民衆は、自分で行動し、前進し、新しい社会秩序に向かって大胆に乗り出すかわりに、彼らの為政者を信頼し、インシアティブをとる労を彼らに任せた。これが選挙の第一の結果であり、宿命的な結末である。では、すべての人々の信頼を託されたこれら為政者は、何をやるであろうか？

が運動に先立って、政府を顛覆したらすぐ何をなすべきかについて理解することができたら！官庁の思想家たちのこの夢が実現されえたら、われわれはけっして流血の革命を経験しないであろう。国民多数の意志が表明され、残りの者は喜んで従うであろう。しかし事はこのように行なわれはしない。革命は一般的な理解が打ち立てられないうちに起こり、運動の翌日なすべき事柄についてはっきりとした考えをいだく者は、この時機にはごく少数でしかない。大多数の民衆は、実現を望む目標については一般的な観念しかなく、いかにしてこの目標に向かって進むかはあまり知らず、たどるべき進路にもあまり信頼を抱いてはいない。実際の解決は、変革がすでに開始されたときはじめて見出され、確定されるであろう。それは革命そのものであり、行動する民衆の所産であり、さもないと無に等しいであろう。何びとであろうと個人の頭脳では、民衆の生活からしか生まれえない解決を見出すことは不可能だからである。

こうした事態は、選挙によって選ばれた者にも現われている。彼が一般の代議政府に固有なあらゆる害害をとらなわれないときにも、そうである。その時期の革命思想を代表する若干の人々は、過去の革命の流派または現存社会秩序の代表者たちの間に身を沈めている。こうした人々は、民衆のさ中で、まさにこの革命の日々には、彼らの思想を広くまきちらし、大衆を動かし、過去の制度を破壊するにはきわめて必要であろうが、広間に釘づけ

になつたまま、穏和派から譲歩をもぎとり、敵を改心させようとしていつまでも議論している。しかし彼らを新しい理念に導くにはただ一つの手段しかなく、それはこの理念を実行することである。政府は、ブルジョア議会のあらゆる欠陥をそなえたままの議会に変わる。それは、「革命的」政府であるところか、革命に対する最大の障害物となり、その場に足踏みしないでいるためには、民衆はその政府を罷免し、昨日は自分たちの選んだ者として喝采した人々をやめさせざるをえなくなる。しかしこれはもうそんなに容易なことではない。その支配を拡大し、人々を服従させるために他のあらゆる段階の行政を急いで組織する新しい政府は、軽々しくその地位を譲ろうとはしない。その権力を保持しようとして、いまだ老朽のために倒壊する時機にはなっていない制度に全力をつくして執着している。新政府は力には力で対抗することに決しており、それを追いつけるにはただ一つの手段、武器をとって革命をやり直し、かくして、人がそのあらゆる希望をかけた人々を罷免することである。

ここで革命は分裂する！ 狐疑逡巡に貴重な時を無駄にしたあと、革命は、新しい政府を支持する人々とその改造を必要とする者たちとの内部分裂によってその勢力を失うことになる！ そしてこれはすべて、新しい生活は新しい形式を必要としていることを理解しないためである。また人が革命を行なうのは、古い形式に執着しないことによつてもない。こうしたことはすべて、革命

に発する命令に従うことを拒否する人々に対しては、民衆であろうとブルジョアであろうと、ギロチンだ！」これが、未来のロベスピエールのごとき人々、過去の世紀の大叙事詩のうち没落の時期しか記憶していない人々、初審裁判所検事の論告しか知っていない人々の論じ方である。

われわれアナキストにとつては、個人なり党なりの独裁——根本において同じである——は、決定的に批判されている。社会革命は一人の人間、または一つの集団の精神によつて指導されるものでないことを、われわれは知っている。また、革命と政府とは両立しえないものであり、その一方は他方を殺さざるをえないし、政府に与える名称は独裁制でも王制でも議會制でも、ほとんど重要でないことをも知っている。わが派の力と真実をなすゆえんものは、次の基本的形式に存することをわれわれは知っている。「正しく永続的なものは何一つ、民衆の自由発意による以外には形成されず、権力はすべてこの自由発意を殺す傾きがある」。このため、われわれのうちの最も優秀な者たちでも、もし彼らの思想が実施されるためには民衆の試練を経るべきでないとしたら、また彼らが、気ままに行動することを可能にする、この政府という恐るべき機関の統御者になるならば、一週間で刺し殺されるにふさわしい人になるであろう。われわれは、独裁という独裁がどこへ導くか、最も善意の独裁でも革命の死に導くことを知っている。最後にわれわれ

と政府とは両立しえないものであり、政府は、いかなる形態で現われようと、つねに革命の否定であり、アナキシー以外では革命は存在しないことを予知しなかつたためである。

II

人々がほめそやすもう一つの形態の「革命政府」である革命的独裁についても、ことはこれと同じである。

革命が直面する危険は、革命が選挙された政府に制せられるままになつていゝ場合、きわめて明らかであるため、ある流派の革命家全体がこの考えをすっかり断念する。彼らは、蜂起した民衆が、過去を代表せず、民衆の足に縛りつけた鉄丸でもない政府に、選挙という手段で身を捧げるのは不可能であり、ことに、われわれが社会革命によつて考えるこの大々的な経済的、政治的および道徳的再生を達成することが問題であるときには、そうであることを理解している。そこで彼らは、「合法的」政府という考えを、少なくとも合法性に対する反抗の期間には放棄し、「革命的独裁」をほめたてるのである。

「政府を倒した党派が」と彼らはいふ、「力づくでそれにとつてかわるだろう。それは権力を奪取し、革命的なやり方で物ごとを処理するだろう。蜂起を成功させるために必要な方策を講じ、古い制度を破壊し、国土の防衛を組織するだろう。その権力を承認しようとしなない者たちには、ギロチンだ。それが革命の前進を規制するため

は、この独裁という思想はいつも、宗教的物神崇拜と並んで、奴隸制を永続化してきた政治的物神崇拜の危険な産物であることを知っている。

だが、今日われわれが話しかけるのは、アナキストに対してではない。われわれは、彼らが受けた教育の偏見に迷わされてほんとうに考えが、いを、議論する以上のことと求めていない、政府中心主義的な革命家たちに話しているのである。したがってわれわれは、彼らの見地に身をおいて語るとしよう。

まず最初に一般的観察を加えよう。独裁を説く人々は一般に、かかる偏見を主張することによつて、後日彼らを死に目に会わせる者たちのために、地ならしをしているにほかならないことに気づいていない。ロベスピエールに、彼の崇拜者たちがよく思い起こす言葉がある。彼こそは原理上独裁を否定しなかつたのである。ところが……彼は、マンダールが、「ブリッソーは独裁者になるだろう！」と語ったとき、いきなりこう答えている、「奴をよく警戒しろ！」しかり、ブリッソーをだ。抜けないジロンド党員で、民衆の平等主義的傾向の宿敵、所有の激しい擁護者（かつては所有を盗奪とよんだのだ）、エベール、マラーおよびすべてのジャコバン穏和派を心安らかに修道院に収監した、ブリッソーをだ。

だが、この言葉は一七九二年のものである！ 当時、フランスはすでに三年のかた革命渦中にある。事実上、王制はもはや存在していなかった。それにとどめの

一撃を加えることだけが残っていた。実際、封建制はすでに廃止されていた。しかも、革命の波が自由にさか巻いていたこの時期にさえ、独裁者として歓呼されるあらゆるチャンスがあったのは、反革命的なブリッソンであったのである。またそれ以前の二七九九年にはどうであったのか？ 第一の権力者と目されたのはミラボーである。その雄弁を売り物にして王と取引をした男。彼こそは、もし蜂起した民衆が槍を支えとしてその主権を強制しなかったなら、またもし彼らがジャックリーのなしたげた事実に従って行動しなかったなら、パリや数々の県にうち立てられたすべての権力を空しいものにする事によって、当時権力の座についていたであろう。

しかし、政府中心主義の偏見は、独裁を語る人々をかくも盲目にしているため、彼らは、自己の鎖を断ち切る人々にほかの主人を与えるという考えを棄てるよりも、新しいブリッソン、ナポレオンのような人物の独裁を準備するほうをよしとしている。

王制復古およびリッパリッパ時代の秘密結社は、この独裁の偏見を維持するのに大いに貢献したのである。当時の共和主義的ブルジョアは、労働者に支持されて、王制を顛覆し、共和制を樹立するために、長いあいだ陰謀をくりかえした。彼らは、ブルジョア共和制が建設されうるためにさえ、フランスに深刻な変革が行なわれねばならないことなど考慮せずに、大々的な陰謀によっていつか王制を倒して権力を奪取し、共和制を宣言す

ることになると考えていた。約三十年の間、これら秘密結社は、限らない献身と堅忍と英雄的勇氣とをもって、たえず活動した。共和制が、一八四八年二月の蜂起からまったくおのずからに生じたとしたら、それはこれら秘密結社とそれらが三十年間行なってきた事実による宣伝のおかげである。それらの気高い努力がなかったなら、現在までなお共和制は不可能だったであろう。

したがって、それら結社の目的は、自ら権力を奪取し、共和制独裁を樹立することであった。しかし、当然のこととしてそれを達成しなかった。いつもと同じく、事の必然的な成り行きで王制を覆滅したのは、陰謀によってではなかった。陰謀者たちは王制失墜の準備はした。彼らは共和制理念の種子を広くまき、彼らの中の殉教者はそれを民衆の理想たらしめた。だが最後の圧力、ブルジョア階級の国王を決定的に倒した圧力は、秘密結社から出てくることのできるものよりはるかに広大で、はるかに強力なものであった。それは多数民衆から発したのである。

結果はよく知られている。王制の瓦解を準備した党派は、市役所における事態の進展から遠ざけられていた。慎重で陰謀の場には参加せず、もっと知的で穩健な、権力奪取の機をねらっていたほかの者たちが、陰謀者たちが砲撃の騒ぎで獲得しようと考えていた地位を掌握した。真の共和主義者たちが武器を造ったり、刑場の露と消えたりしている間に、有名になろうとつとめていた著

述家や弁護士、口の巧い者たちが権力を横取りした。その中のすでに著名な人々は弥次馬たちに喝采され、他の人々は自分で自分を押し出して受け入れられた。それというのも、彼らの名が、世のすべての人々との妥協という綱領以外の、何ものをも表わしていなかったからである。

人は、行動的な党派の側に実際の精神が欠けていたからだとか、ほかの党派ならもっとうまくやるだろう、などといわないがよい。そうではない、絶対にそうではないのだ！ 行動的な党派は外部にとどまり、他方陰謀家、弁舌家たちが権力を横取りするというのが、天体運行の法則と同様に、法則である。これら陰謀家や弁舌家は、最後の圧力を加える大衆の間でより知られており、より多くの票を集める。なぜなら、投票用紙を用いようと用いまいと、喝采によるうと投票函をとおそうと、この間喝采によって行なわれるのは、根本においてはおね一種の暗黙の選挙だからである。彼らはすべての人々に、とりわけ無能な者たちを好んで前面に押し立てる革命の敵たちに喝采され、かくして喝采は、実際には革命の敵が無関心者かでしかない者たちを指導者として認めただのである。

他の何びともまさってこの陰謀方式の体現者であった人物、この方式への献身を獄中生活で払った人物は、その死の前夜に、彼の全綱領である次の言葉を放った、神もなく主人もなく！と。

III

政府を一つの秘密結社によって倒し、それに代わるものとしてこの結社を樹立することができると思えるのは、一八二〇年いご共和主義ブルジョアジの内部に生まれた、すべての革命組織がおちいつている過誤である。だがこの過誤を明白にする他の多くの事実が存在する。若いイタリアの共和主義秘密結社によって、どのような献身、どのような犠牲、どのような堅忍が發揮されたかを、人は見なかつたか？ しかるに、その前ではロシアの若い革命家たちのそれさえも色あせるほどの、イタリア青年たちははらった莫大な努力や犠牲のすべて、オーストリアの要塞の地下牢に積み重ねられ、また死刑執行人の刃や銃弾でたおれた死骸のすべて、これらすべての相続者はブルジョア階級と王党派の悪党たちだったのである。これはロシアにおいても同様である。ロシアの青年たちがなしたげたように、わずかな手段で大きな成果を獲得し、「執行委員会」に劣らぬ強力なエネルギーと行動力を実証した秘密組織は、歴史上まれに見るものである。それは不死身とも見えた巨人、ロシア帝制をゆり動かし、それらロシアでは専制政府を不可能にした。しかし、アレクサンドル三世の王冠が泥土にまみれる日に、執行委員会が権力の主人公になるであろうと考える人々は、まったく単純素朴である。他の人々、革命家たちが地雷を仕かける坑を掘ったり、シベリアで死

んだりしている間に、自分の名声をあげることにつとめた思慮深い人々、英雄たちの墓にときどきすぐ乾く涙を流し、民衆の友のようなふりをする陰謀家、弁舌家、弁護士、文学者たち——こうした人たちがこそは、政府の空席を占めにやってきて、革命を準備した「無名の人々」に「どけ！」と叫ぶのである。

これは不可避免的であり、宿命論的であり、これ以外ではありえないことである。なぜなら、政府にとどめの一撃を加えるのは、秘密結社でなく、革命組織でさえもないからである。それらが果たすべき機能、歴史的使命は、それらが目ざす革命に向かって人々の精神を準備することである。この精神が準備されるとき、外部的事情の助力をえて行なわれる最後の圧力は、先導のグループからではなく、結社の諸分派の外部にとどまっていた大衆から発するのである。八月三十一日（一八七〇年）、パリはブランキの呼びかけに黙したままであった。四日後、彼は政府の失敗を宣言する。しかし、そのとき運動の先導者（十二月政変を起し）は退位させ、道化役者たちを喝采して迎えたのは民衆、いく百万の民衆であり、これら道化役者たちの名は二年前から彼らの耳に鳴り響いていたのである。革命がいまにも起ころうとしているとき、その動きの気配が感じられるとき、成功がすでに確かとなったとき、そのときにこそ、秘密組織がかつて直接の影響を及ぼしたことはない多数の新しい人々が、あたかも饑

牲者の遺骸の分け前にあずかろうと戦場にやってくる猛禽のように、運動に参加しにやってくる。彼らは最後の圧力を加える助けにはなる。だが、首長が必要であるという観念を吹きこまれていくかぎり、彼らが首長をえらぶのは、真摯で非妥協的な陰謀参加者たちの中からではなく、ブランコの操り人形のような人間のあいだからである。それゆえ、独裁という偏見を固執する陰謀家たちは、知らずして彼ら本来の敵を権力につかせることに尽くしているのである。

だが、われわれがいま述べたことは、政治革命またはむしろ政治的暴動とのかかわりにおいて真実であるとしても、われわれが望んでいる革命、すなわち社会革命に關してはいっそう真実なのである。何かある政府、強力にして服従を求める権力が確立されるままにすることは、革命の進行を最初から阻むことである。このような政府がなしうる善は皆無であり、悪は無限である。

実際、何が問題であり、革命によって何をわれわれは理解するのか？ これはたんに政府を変更することではない。それは民衆がいっさいの社会的富をわがものとするのである。それは人類の発展をたえず妨げてきたいっさいの権力を廃絶することである。だが、政府の発する法令によって、この巨大な経済革命が達成されうるであろうか？ われわれは前世紀にポーランドの革命的独裁者コシユージョが人身農奴制廃止の法令を発したのを見た。農奴制はこの法令が出てから八十年も存続した。

われわれは国民公会が、それを讚美する者たちのいうところでは万能の国民公会、恐るべき国民公会が、領主から取り返した共有地のすべてを、頭割りに分割することを命じたのを見た。この法令は、他の多くのものと同様に、死文のままであった。それというのも、それを実施するには、農村のプロレタリアが新たな革命の全体を果すことが必要であったし、革命は法令の発布では行なわれないからである。民衆による社会的富の占有が既成の事実となるためには、民衆が自由に振舞えることを感じ、ただあまりにも慣れてきた隷従をゆり動かし、冷静に事に処し、何びとの命令をも待たずに前進しなくてはならない。ところが、こうしたことこそは、独裁がこの上もなく善意なものであるときでさえ、妨げるところのものであり、また同時に、独裁は革命をほんの一步でも前進させることはできないであろう。

だが、政府が、よし革命政府の理想とするそれであっても、新しい力をつくりださず、われわれが果たすべき破壊作業になんらの利点も提供しないならば、なおさら破壊のあとに来たるべき再組織の作業については、政府を当てにしてはならないのである。社会革命から起る経済的変革は、かくも広大かつ深刻であり、今日所有と交換にもとづいて行なわれているいっさいの関係をすっかり変革しなくてはならないため、将来の社会に成立すべき社会形態を考え出すことは、一人や数人の者によつては不可能である。新しい社会形態についての考えをこ

のように作りあげることが、大衆の集合的作業によってのみ可能である。個人的所有が廃止される日に生ずるであろう、限りもなくさまざまな条件と必要を満たすためには、一国の集合的精神の柔軟さが必要である。外部のあらゆる権力は、達成すべきこの有機的作業に対しては極枯・障害でしかなく、したがって不和と憎悪の源泉でしかない。

だがいまやまさに、かくもたびたび裏切られ、かくも多くの尊い犠牲を払ってきたこの革命政府という幻想を棄てるべき時である。政府は革命的ではありえないことを、こんどこそ心して、政治的公理として認めるべき時である。よく人は国民公会のことをわれわれに語る。しかし、国民公会が採用した方策が、多少は革命的な性格のものであったにしても、それは、当時すべての政府の頭ごしに前進した民衆がなしとげた事実の是認であったことを、忘れてはならない。ヴィクトル・ユゴーが生彩ある文章でのべたように、ダントンはロベスピエールを圧迫し、マラーはダントンを監視し圧迫し、そしてマラー自身はシムールダンに圧迫された。これは「過激派」や叛逆者のクラブの擬人化である。国民公会も、それ以前およびその後のすべての政府と同じく、民衆の足を引っ張る重荷にすぎなかったのである。

歴史がわれわれに教える事実、この点きわめて明確である。すなわち革命政府が不可能事であり、この名で示されるものが有害であることはあまりにも明白であ

り、そのため、社会主義を称するある流派が政府という觀念の保持にける熱烈さは、説明しがたいように見える。しかしその説明は簡単である。それは、この派の錬金術師である自称社会主義者たちはすべて、その達成をわれわれの任務とする革命について、われわれとはまったく別の概念をいだいていることである。彼らにとつては、すべてのブルジョア急進主義者にとつてと同じく、社会革命とは、今日考える必要のない、むしろ将来の事柄なのである。彼らが、あえて自認せずに心の底で夢見ているのは、まったく別のことである。これは、スイスまたは合衆国のものと同様の政府を樹立し、巧妙にも「公益事業」とよぶものを国家に所属させるといふいくつかの企てをなすことである。これは、ビスマルクの理想や合衆国の大統領にもなる仕立職人の理想に似た何かである。これは、大衆の社会主義的渴望とブルジョアの欲望との間にあらかじめなされた妥協である。彼らは全的な取用を望んではいるが、それをやってみる勇氣を自覚せず、それを次の世紀に延期し、戦う前にすでに敵との商議にはいるのである。

ブルジョア階級に死の一撃を与える時が近づいていること、民衆がすべての社会的富を手中に収め、搾取者階級を無力にする時の遠くないことがわかっているわれわれとしては、あえていうが、ためらうことはありえないのである。われわれは身も心も社会革命に投ずるのである。そしてこの道においては、政府はどのような帽子を

被ろうとも、障害であるがゆえに、われわれは、野心家たちがわれわれの運命を支配しようとして押ししかつてくるのに応じ、彼らを無力にし、一掃するであろう。政府はたくさんだ、民衆に席をあげよ、アナキーに席をあげよ！

アナキーの哲学、その理想 1896

その内部に蓄積されたいさいの富を再び占有する社会は、一日四、五時間有効な生産的筋肉労働に従うかわりに、万人に豊かさを確保しうること、これについては、この問題をよく考究した人々の全員一致の同意が、すでに得られている。もしも各人が幼い時から、彼が食べるパン、彼が住む家、彼が勉強する書物等々がどこからくるのかを知ることや学び、また各人が、筋肉労働によるなんらかの生産部門での腕の仕事によって思考の仕事を補うことに慣れたならば、社会は、われわれが多少とも近い将来に留保する生産の単純化を当てにせずして、この任務を容易に果たすことができるであろう。

実際、文明社会が、各自のいかにわずかな労働で何を生産することができるか、今日問題外になっているどんな大きな事業を企てることができるかを理解するには、いま行なわれている、人間諸力の前代未聞な、想像を絶する浪費を、ちょっとでも考えれば十分である。不幸にして、経済学と名づけられる形而上学は、その本質をなすはずの問題、すなわち力の節約をかつて研究したことがないのである。

われわれがそうであるように、必要な設備を整えた共産主義社会における富の可能性については、もはや疑問の余地はない。疑問が起こるのは、そのような社会が、人間のすべての行為を国家の統制に従わせることなくして存立しうるかどうか、ヨーロッパの諸社会は、安楽に達するの、今世紀中にあんなにも多くの犠牲を払って獲得した個人的自由のわずかを犠牲にすることが必要でないかどうかを知ることが問題になるときである。

一部の社会主義者は、国家の祭壇に、その自由を犠牲にすることなしには、このような結果に達することは不可能であると確言する。われわれが属する他の者は、それと反対に、ひとり国家の廃止、個人の十全な自由の獲得、自由合意と無条件に自由な団体および連合によってのみ、われわれは共産主義に、われわれの相続財産の共同所有に、あらゆる富の共同生産に達することができることを主張する。

ここにこそ、いま他のすべての問題に優先し、社会主義がそのあらゆる努力を危うくされたり、こんごのすべての発展が麻痺させられたりするのを見まいとするならば、解決することを迫られている問題がある。

もし一人ひとりの社会主義者が、後になって彼の思い出の中で回想しようとするならば、彼が最初に、資本主義制度と土地および資本の私的専有との廃止が、歴史的必然となつていてと考えるにいたったときに、彼が目ざめさせられた多くの偏見を、おそらく思い起こすであら

う。
同じことは、国家とその法律、いっさいの管理の、政府中心主義の、中央集権の全制度を廃止することが歴史的必然となっており、しかも他方の廃止なくしては一方の廃止は実質上不可能であるといわれるのを、はじめて聞く者にも起こっている。大いに注意を喚起したいことだが、教会と国家とによって、その利益のために行なわれているわれわれの教育のすべては、この考えに反抗するものである。

しかし、このために、その考えの正しさが少なくなるであろうか？ われわれが解放のために犠牲に供した数人の偏見の中で、国家の偏見は生き残るであろうか？ 賃金労働者としてとどまるかぎり、労働者は、その買手が個人であろうと国家であろうと、彼の労働力を売ることをよぎなくされる者の奴隷であることに変わりはないであろう。

民衆の精神、人間の頭脳をよぎる数多い意見のこの総和の中にもまた、もし国家が雇主に代わって労働力の買手の役割をつとめ、それを監督するならば、さらに忌わしい圧制となるであろうことを人は感じている。庶民は抽象によって推論せず、具体的な言葉で考える。それゆえ、彼らの感ずるところでは、一國という抽象物は、工場や仕事場の仲間の中からえらびとられた多数の官吏の形を帯びている。庶民は彼らの徳をどう考えたらよいか知っている。彼らは、今日はりっぱな仲間であるが、

ロシア革命におけるクロボトキン

ロシア革命におけるアナキストの役割は、このアンソロジーのII巻で扱われることになるが、ここでこの年代順の計画を変えることが必要となった。実際、クロボトキンのさまざまな著作をあれこれ引き離さないためには、何年かをとびこえて、一九一七年十月革命後、故国に帰ってからの「アナキスト公爵」の重要な文書にいまから、手をつけるのがよいと考えたのである。

ゲオルク・ブランデスへの手紙 1919

親愛なる友よ²⁾

やっとあなたに手紙を書く機会がきました。私は急いでこの機会を利用しますが、しかしこの手紙がお手もとに届くかどうかは確かではありません。

私たち二人は、私の逮捕の噂がひろまったとき、あなたが旧友にお示しくくださった親身なお心遣いに心から感謝しています。この噂は、私の健康状態についてのでたためな話と同様に、まったくの偽りだったのです。この手紙をあなたに届けてくださるどなたかが、田舎

明日はがまんのならぬ管理者になる。そこで庶民は、新しい悪をつくりださずに現在の悪を排除する社会体制を探索する。

これゆえにこそ、集産主義はかつて大衆を熱中させたことがなく、大衆はいつも、共産主義にもどり、しかも神権政治や四〇年代のジャコブンの権威主義からいよいよ離脱して共産主義に、自由アナキスト共産主義にもどるのである。

さらにいおう、私は自分の思想を、ヨーロッパの社会運動においてこの四分の一世紀間にわれわれが見てきたことに、たえず照らし合わせることにより、現代の社会主義はいやおうなく、リベルテール共産主義に向かつて前進するものと考えざるをえないのである、と。

の小さな村で私たちが過ごしている孤立した生活のことを、あなたにお話しになるでしょう。私の歳では、革命最中に公務に参加することは事実上不可能ですし、また物好き半分です。それにとどまらず、私の性分ではありませぬ。モスクワで過ごした去年の冬には、一団の協力者たちといっしょに、連合主義共和制の原理を作成することに働きました。しかしこのグループは解散しなくてはなりません。そこで私は、十五年ほど前イギリスではじめた倫理学に関する著述に戻っています。

いま私にできるのは、ただあなたにロシアの事態について一般的な考えをお知らせすることです。これは、私の意見では、西ヨーロッパに正しく伝えられていませぬ。ある類比がたぶん事態を説明するでしょう。

私たちはいま、フランスが一九二二年九月から一九二四年九月のジャコバン革命のさいに経験したことを通りぬけています。ただちがうのは、進路をさがしているのがいまは社会革命だということです。

ジャコバン派の独裁方法は間違っていたのです。それは安定した組織をつくりだすことはできず、当然反動に帰着するものでした。しかし、それにもかかわらず、ジャコバン派は、立憲議会も立法議会も一七八九年に着手しながら完成しようとしなかった、封建的諸権利の廃止をなしとげました。また彼らはすべての市民の政治的平等を声高く宣言しました。これらは、十九世紀中にヨーロッパを一巡した二つの基本的変革です。